

留学生の SNS 利用、ニュース視聴と異文化適応の相関分析

黄 偉 明

Abstract

This paper reported an empirical study of the relationship among international students' SNS usage, news viewing and their cross-cultural adaptation. In the 2010s, international students can use ethnic SNS to communicate with friends in their home countries everyday. Also, many people view news from SNS, where the news is mostly shared from peers with the same culture. It is possible for international students to retain ethnic culture by using these ethnic medias. To explore international students' media usage effects on their cross-cultural adaptation, a survey was conducted among Chinese international students (N = 107). Media usage was examined by ethnic SNS usage and contact with host people, and news viewing (ethnic news and host news). Cross-cultural adaptation was tested by acculturation index scale (ie.,cultural maintenance and cultural assimilation) and sociocultural adaptation scale (SCAS). The results indicated that there was a positive correlation between ethnic SNS usage and cultural maintenance. The contact with host people was positively related with cultural assimilation. In addition, analyses revealed that news viewing was associated with both acculturation and sociocultural adaptation. These findings suggested that, to balance the perspective from different cultures, the awareness of using international students' host social media usage should be raised. Implications of studying international students' social media usage were proposed for people who focus on enhancing international students' communication and the host country.

キーワード……SNS 利用 留学生 アカルチュレーション 社会文化的適応

1.はじめに

日本での留学生は増えており、2015年には208,379人に達している。その内、中国人留学生は45.2%を占めている(JASSO,2015)。留学生の増加により、異文化適応問題が注目を集めている。SNSなどのメディア利用により、留学生が母国の対人関係を持続することができるようになってはいるだけでなく、母国に関する情報、ニュースを毎日取得することも可能になっている。留学生はホスト国においても、母国文化が非常に身近になっている。その一方、ホスト国の文化と接触する機会が削られると考えられる。N.Park(2014)が、SNS利用については留学生のアカルチュレーション・プロセスの役割を研究するべきだと論述しているように、SNS

と異文化適応との相関に関する研究が出てきた。例えば、Ellison, Steinfield & Lampe (2007) は、留学生の SNS 利用とソーシャルキャピタル、情報獲得との相関について検討した。Lin ら(2012) は、留学生の Facebook の利用とソーシャルキャピタル、異文化適応との相関について研究した。しかし、N.Park (2014)が指摘したように、母国語の SNS 利用は調査せずに、Facebook のような特定の SNS 利用の調査だけで異文化適応との相関を検討した。母国語の SNS がホスト国においても容易に使えるようになっていて、母国文化に毎日触れることを可能にする現在、留学生の母国語の SNS 利用についての調査を行うべきだと思われる。

また、2010 年代の SNS とメッセージングアプリの多機能化により、受信者はニュース、報道などを受信するだけでなく、コメントを発信して、発信者に返事をしてコミュニケーションを取ることが可能になっている（草野,2015）。SNS 経由でニュースとニュースに対するコメントを見る人が非常に増えており、大学外のことを知るためのリソースが SNS、すなわち、本来の文化を共有していた人が勧めるニュースしか受け付けなくなっている人が増えている。留学生の SNS 利用にニュース視聴をつけて調査する必要があると考えている。なお、留学生の国際的出来事の受容は、彼（女）らが出来事の利害関係を俯瞰的に理解するかどうかを示唆する。留学生の SNS 利用、ニュースの視聴、および国際的出来事の関心度は、彼（女）らの異文化の受け入れ、異文化適応に影響を与えると考えられる。そこで、本研究は、2010 年代の留学生の SNS 利用とニュース視聴、および国際関心度を調査する上で、彼（女）らの異文化適応との相関関係を明らかにする。

2. SNS

2.1 小史

SNS (Social Networking Service)とは、WWW 上で知人関係を形成し相互交流を行うためのプラットフォームである（松尾・安田、2006）。Boyd & Ellison (2007)によれば、最初に認識された SNS は 1997 年に登場した。大向 (2015)によると、初期の SNS は、ユーザーが自身のページを作成するサービスに限定されていた。参加者がそれぞれのプロフィールを掲載し、知人のページとリンクする機能だけを備えていた。当時、招待制や相互承認は口コミによって参加者を集めるための仕掛けにすぎなかった。しかし、デジタル加入者線 (DSL) や光ファイバー、携帯電話でのデータ通信など個人のインターネット接続環境が整備され、「ウェブ 2.0」が進化したことにより、知人関係に基づく情報共有の仕組みは、コミュニケーションだけでなく他分野にも適用可能になった。写真共有の Flickr、ニュース共有の Digg、動画共有の YouTube などが相次いで開設され、様々な SNS で多くのユーザーを集めている。2004 年に Facebook は開設されていたが、当初は大学内でのネットワーキングを目的としており、一般向けには公開されていなかった。2006 年 9 月に、学生以外の一般ユーザーの Facebook の登録が開始されたこ

と、また積極的かつ継続的な新規機能の投入を行ったことなどを要因として、2009年5月に世界最大の SNS となった。その後も順調に拡大し、ロシア・中国などを除くほぼ全ての国で最も利用される SNS となっている。

松尾・安田(2006)によると、日本では2004年から、GREE、mixi、Orkutなどが、それぞれ独立のサービスとして無料で提供された。2015年に日本のユーザーが利用していた SNS は、LINE(37.5%)、Facebook(35.3%)、Twitter(31.0%)の順となった(総務省,2015)。その一方、CNNIC(2016)は34の地域のインターネットユーザーを対象に、中国の SNS 利用状況について調査した。統計の結果によると、中国には国産の SNS が極めて多く普及していることがわかった。よく使われる SNS は RenRen、weibo、QQ zone、pengyouquan などである。Facebook 型の Renren と Twitter 型の weibo が多くのユーザーを集めて、両方でも1億以上のアクティブユーザーを持つ(大向,2015)。QQ zone と pengyouquan はメッセージングアプリと連携しているものである。Tengxun 会社が開設した IM (Instant messaging) — QQ を元に、QQ Zone は2005年からプロフィールの掲載、写真、ニュース、リンクなどの情報を QQ の友人と共有するサービスが始まった。pengyouquan は同じように、wechat という IM を元に、2012年から音楽、ニュースなどの情報を知人間で共有することが可能になっている。QQ zone、pengyouquan などの SNS 利用で、個人のプロフィールを掲載するだけではなく、自身の最近の出来事やニュース、ネット記事に対しての意見、感想を親密な友人間で容易に共有し、伝えることができるようになった。CNNIC(2016)の調査によると、SNS のユーザーの主な利用目的は、友達とコミュニケーションする(72.2%)、ニュースを知る(64.3%)、興味のあるものをフォローする(59%)、知識を獲得する(58.3%)、知識を共有する(54.8%)となっている。中国のユーザーは、友人とコミュニケーションするだけではなく、情報を共有するために SNS を利用することがわかった。

2.2 メッセージングアプリ

2000年代末以降のスマートフォンの普及に伴い、ソーシャルメディアの機能は、かつてと異なり、LINEをはじめとするメッセージングアプリの利用機会が増えている。これによってユーザー間でリアルタイムに短いメッセージのやりとりができるようになった。近年はテキストや音声だけでなく、スタンプ(イラスト)、動画、画像など、さまざまな表現機能を搭載するサービスが増加している。手軽なコミュニケーション手段として若年層を中心に人気を博している。

従来型の ID 制のメッセージングアプリは互いの ID 交換等が必要であったが、LINE では、端末に電話番号を登録している友人がすでに LINE ユーザーであれば、自動で友達リストに追加されていくため、アプリを導入するとすぐに友人とのメッセージのやり取りを始めることができる。他のメッセージングアプリも LINE と同様に、同じメッセージングアプリを利用する

知人を簡単に追加することができる。例えば中国が開発した wechat も、登録している電話番号から友達リストに追加される。なお、2010 年代のクラウドサービスとスマートフォンの普及は、利用者の行動履歴というパーソナルデータをインターネット上に蓄積することを可能にした。そのため、ホスト国においても、人間関係がリセットされてしまうことなく、母国で得た知人の連絡先とメール履歴はいつでも復元可能となっている（黄,2016）。母国以外のメッセージングアプリを利用しても、端末に電話番号を登録している留学生同士が、母国の人を追加して、メッセージ送受信が可能になっている。また、世界的に普及している通信環境により、メッセージングアプリが留学生の保護者世代を含めた幅広い層にまで利用者を拡げている。メッセージングアプリの普及は、留学生が留学先で母国との頻繁な交流の機会を提供しているのである。

2.3 ニュース報道と SNS

SNS はメッセージングアプリとして機能するだけでなく、ニュース報道を提供することも可能になっている。2010 年から、様々なニュース報道の組織が Facebook でニュース報道の提供を開始した。Carroll (2012) が述べているように、ニュース報道の共有とディスカッションは SNS 利用の重要な機能となっている。友人と連絡する機能を利用するユーザーにとっても、ニュース報道を避けることはできない状況となっている。世界中のマスコミがニュースを 1 つのコンテンツとしてネットに発信することが、SNS 上でニュースを複数比較しながら見ることを可能にしている。しかしながら、関連ニュースを訳して提供されるニュースは、必ずしも客観的な見方とは言えない。限られたスペース内で限られた考え方の報道を提供していると考えられる。草野 (2015) が述べているように、現在の通信環境において、一人で受け止めきれない量の情報に接しているが、SNS 利用は「関係」の近い者からの情報を選択するという重要な役割を果たす。つまり、SNS 利用を通して、近い文化を共有する知人から情報を獲得することが可能になっている。

SNS 利用で、単にニュース報道を見るだけでなく、コメントと情報を発信することも可能になっている。草野 (2015) が指摘しているように、従来の新聞、テレビなどといったマスメディアは、情報の流れが一方通行となり、「受ける側」と「送る側」がはっきり分かれ、数少ない「送る側」は「受ける側」に情報を届けるという形態であった。しかし、SNS のようなソーシャルメディアは、情報の受け手が単なる「受け手」ではなく、「送り手」になることも可能になっている。つまり、SNS の利用者はニュース報道、情報などを受けるのみならず、自らが不特定多数に対して情報を発信することもできる。また、不特定多数の受け手もまた発信者に返事をして、コミュニケーションを取ることができる。そのため、留学生の偏った母国語の SNS 利用と母国語のニュース視聴は、母国の人からニュース、情報を獲得するだけでなく、本来の文化の観点に立ち、お互いに最近の出来事についてやり取りをすることも可能になっているが、異文化適応に偏りが生じる可能性がある。

2.4 SNS と文化

Facebook、LINE、wechat など様々な SNS があり、ユーザーは自由に選択することができるが、草野（2015）が述べているように、機能だけを比べるならば、どの SNS にも大きな差異はない。SNS を差別化するポイントは、機能ではなく、自分の行動を誰に、どういう形で、伝えたいかということがポイントとなる。ホスト国においても、母国語の SNS と母国語以外の SNS を選択することが可能になっている現在、留学生の SNS の選択は、連絡相手の選択だけではなく、どのような文化を受けるか、どのような文化を伝えるかを選択することだと考えられる。

SNS は 1 つのプラットフォームの役割を果たし、ユーザーが個人ページ、グループページとメッセージングアプリを使う際に連携して使用される。2010 年代に入り、遅延が少なく、利用制限もより少なくなったため、快適な利用可能環境が用意された。このことは、利用者を繋ぎ止める役割を果たしている。SNS の経営方針は、まさに利用者に継続して利用し続ける環境と利便性をもたらすことである。多くの利用者がその利便性を活用しており、そのこと自体に問題は無いが、他の文化や価値観を取り入れることを目指す人にとっては、その目標達成にとって、必ずしも有益とは限らない。

母国の人が SNS で発信した動画、画像、ニュース報道などは、母国と離れている留学生にとっては、母国の人とのコミュニケーションの話題を提供してくれるものとなっている。母国語の SNS 利用で、留学先においても、母国の社会変化、流行っている文化などに取り残されることはなく、母国に関する情報、話題を毎日獲得することができるようになってきている。なお、最近の出来事、国際情報などについても、母国の人が発信した母国文化による価値観、観点に触れることも可能になっている。その一方、母国以外の文化による価値観で出来事を見る機会が削られる可能性もある。母国文化による価値観だけで出来事との利害関係を見ることに陥る傾向も見られる。母国の文化、価値観を当然のこととして、客観的に物事を批判する機会が限られる。多文化的な立場から物事を見るための視野が広がらずに、母国の文化、価値観が留学する前そのまま保持される可能性もあると考えられる。

3. 異文化適応

Kim (2001) によれば、異文化適応に関する研究は 20 世紀から継続して行われている。滞在者 (sojourner) がどのように文化の変化に対応するかについて論述できるように、様々な用語が使われている。例えば、「アカルチュレーション」(acculturation)、「同化」(assimilation)、「適応」(adaptation) などがある。「アカルチュレーション」は、滞在者がホスト文化への統合のプロセス或いは程度を指す。「同化」は、滞在者がホスト文化をどれだけ受け入れたのかを指す (Kim, 2002)。Berry (1980, 1997) の「アカルチュレーション」モデルは滞在者の「同化」について検討するだけではなく、本来の文化への対応についても研究する。「適応」(adaptation) と

いう用語を使っているモデルは多く存在する。例えば、Kim (2001) の「異文化適応」(cross-cultural adaptation) モデルは、コミュニケーションが果たす旅居者の適応プロセスでの役割を中心に論述されている。Ward ら (1994 ; 1999) は異文化適応を心理的 (感情的・情動的) 適応と社会文化的 (行動的) 適応という二つの領域に分けて、適応状況を捉えている。

3.1 アカルチュレーション

アカルチュレーションは「異なった文化をもっている人びとの多くのグループが持続的・直接的に接触をし、その結果、本来の文化パターンを片方、または双方のグループが変化するような結果を生ずること」と定義される (Redfield, Linton & Herskovits, 1936)。アカルチュレーションのプロセスについては「一次元」(unidimensional) と「二次元」(bidimensional) の二つの論点がある。「一次元」とは、二つの文化・アイデンティティが同時に存在せず、新しい文化が本来の文化、アイデンティティに代わっていくことである (Gordon, 1964; LaFromboise, Coleman & Gerton, 1993)。その一方、「二次元」に論述する研究者は、新しい文化を取り入れると同時に本来の文化を保持することも可能であるとしている (Berry, 1980; Zak, 1973)。

Berry (1997) によると、アカルチュレーションをもたらす異文化社会との接触は、「自主性」、「移動性」、「永続性」という 3 つの要素で大別することができる。つまり、一部分のグループ (例えば、移民者) は、自発的にアカルチュレーションを経験するが、その一部分のグループ (例えば、難民) は選択せずに経験する ; 一部分のグループ (例えば、移民、難民) は、新しい場所に移住するため、アカルチュレーションを経験するが、一部分のグループ (例えば、先住民) は移住しないが、新しい文化の持ち込みでアカルチュレーションを経験する ; 一部分のグループ (例えば、移民) は、永続にアカルチュレーションを経験するが、一部分のグループ (例えば、留学生) は、一時的に経験する。様々な滞在によりアカルチュレーションがもたらされるが、各グループが経験する基本的なアカルチュレーション・プロセスが共通するという結論がある (Berry & Sam, 1996)。すべてのグループが滞在中の異文化社会において、どのように適応するかを検討しなければならない。新しい文化環境での生活においては、本来の文化やアイデンティティを保持するか、ホスト国社会と積極的な関係を持つかという 2 つの主な課題を検討するべきである。この 2 つの課題は「二次元」で検討することが可能である。つまり、本来の文化やアイデンティティを保持しながら、ホスト国社会と積極的な関係を実現することができる。その一方、本来の文化の保持、ホスト国との関係という 2 つの課題にも関心を示さない可能性もある。本来の文化やアイデンティティ、ホスト国との関係への対応は、教育と言語の使用、友情パターンなどのアカルチュレーション・プロセスにおいて相関があると論じられている (Berry, 1989)。

3.2 社会文化的適応

Ward & Kennedy (1993) は、ホスト文化の理解の欠如が異文化適応の問題の原因となると論じ、さらに、新しい文脈、環境において、ホスト文化を適切に理解することを「社会文化的適応」と定義している。Ward & Kennedy (1994) の「社会文化的適応」は、日常生活において体験する困難について検討するものである。「社会文化的適応」はホスト国文化の学習、ソーシャルスキルの獲得とは相関がある。それは、アカルチュレーション態度、ホスト国の人とのコミュニケーション、文化的距離などを含んでいる (Ward & Kennedy 1993,1994)。

Berry (1980,1997) の「アカルチュレーション」モデルは、個人がどのように母国の文化、ホスト国の文化を対応するかを検討して、異文化への適応の仕方を調査するものである。Berry (1980,1997) の「アカルチュレーション」モデルと Ward & Kennedy (1994) の「社会文化的適応」は異なっているものであるが、Ward & Kennedy (1994) はこの二つのモデルに相関関係があると論述している。Ward & Kennedy (1999) は Berry (1980,1997) のアカルチュレーションの理論を母国へのアイデンティティ (co-national identification) とホスト国へのアイデンティティ (host identification) に分けて、「社会文化的適応」との相関を研究した。その結果、ホスト国へのアイデンティティは社会文化的適応の困難さとは負の相関があることが示唆された。

3.3 指標の導入

Berry (1997) の「アカルチュレーション」モデルは、母国文化の保持、ホスト国文化への同化を別々に分けて調査することができるものである。その一方、Ward & Kennedy (1999) の「社会文化的適応」モデルは、日常生活で必要なホスト国のルールや習慣などに従うことの難易度を問うものである。SNS 利用を通して、留学生はホスト国においても、メッセージングアプリの利用により、母国の友人との会話がいつでも継続できて、母国の人間関係の持続が可能になっている (黄,2016)。なお、母国の人から発信した国際情勢のコメントをチェックすることも容易にできるようになった。これらの通信環境において、母国語の SNS などのメディア利用は、母国の人、母国文化に毎日触れる機会を提供している。また、母国文化、母国文化の価値観などを保持する可能性も増やす。一方で、母国の文化の立場だけで物事を捉え、異文化の視点に立つ機会が限られると考えられる。そこで、留学生の SNS などのメディア利用は、彼(女)らの母国文化の保持、ホスト国文化の受容、ホスト国の生活習慣への適応の難易度などに影響があるかどうかを調査するため、これらの指標を調査目標に導入する。

4. メディア利用と異文化適応

通信環境の変化に伴い、Cemalcilar (2005) が論じているように、メディア利用は母国との連絡を続ける可能性を提供するだけでなく、母国との対人関係、政治、文化を持続することも

可能にしている。Cemalcilar (2005) は留学生の CMC 利用（コンピュータを介して行うコミュニケーション）と母国文化の保持について相関を検討した。その結果、母国と連絡するための CMC 利用は、母国文化の保持とはポジティブな相関があることが示されている。しかし、異文化への同化との相関についての論述がなかった。JiaQi (2013) は留学生の異文化適応を母国文化の保持、異文化への同化に分けて調査する上で、メディア利用の一つとするインターネット利用と異文化適応との相関を検討した。その結果、母国文化と関連のあるインターネット利用は、母国文化の保持とはポジティブな相関があることが示唆された。その一方、ホスト国文化と関連のあるインターネット利用は、異文化への同化とはポジティブな相関があると述べられている。留学生のインターネット利用とアカルチュレーションとの相関が指摘されたが、ネット・ニュース視聴、メッセージングアプリ利用と母国文化の保持、ホスト国文化への同化とのそれぞれの相関は述べられていなかった。なお、インターネット利用と心理的適応との相関は有意差がないことで異文化適応との相関が示唆されていない。

スマートフォンの普及に伴い、SNS などのメディア利用と異文化適応との相関が注目されている。例えば、Jian (2015) は、留学生の SNS 利用と異文化適応との相関を研究した。その結果、ホスト国にいるホスト国の人との連絡は、留学生の不確実性の減少 (Uncertainty Reduction) とポジティブな相関がある一方、ホスト国の母国人との連絡は留学生の不確実性の減少とネガティブな相関があることが示されている。Jian (2015) によると、母国の人はホスト国の人のようにホスト国の文化を理解していないため、ホスト国でよく連絡する母国の人に、ホスト国の文化に対して偏った理解へと導かれる可能性がある。しかし、母国にいる家族、友人との連絡と異文化適応との相関が示されていない。N.Park (2014) はアメリカでの中国人と韓国人の留学生を対象に、SNS 利用、マスメディア利用と異文化適応との相関を検討した。その結果、母国語の SNS 利用はアカルチュレーション・ストレスとはポジティブな相関があることが指摘された。しかし、母国語の SNS 利用は多くあるが、N.Park (2014) は中国の RenRen と韓国の Cyworld しか調査していない。なお、新聞などのマスメディア利用とアカルチュレーション・ストレスは有意差がないことで異文化適応との相関が示唆されていない。

上記の 3 節に論述したように、Ward & Kennedy (1994) によれば、アカルチュレーションと異文化適応は相関があることがわかった。しかし、上記の先行研究では、SNS などのメディア利用が留学生のアカルチュレーションとの相関、あるいはメディア利用と異文化適応との相関のいずれかのみ照射している。しかし、留学生の SNS 利用は、彼（女）らの母国文化の保持、異文化の取り入れに影響を与えることが考えられる。その一方、留学生の SNS などのメディア利用を通して、母国文化、異文化へ対応することは、彼（女）らのホスト国における社会文化の適応に影響するとも考えられる。そこで、本研究は留学生の SNS 利用とアカルチュレーションとの相関を検討するだけでなく、社会文化的適応との相関も調査していく。

5.調査の概要

5.1 調査協力者

新潟大学の中国人留学生 150 名を調査対象とし、最終的に回収した有効回答は 107 名であった。調査協力者の個人情報：性別、年齢、滞日歴、日本語学習歴などを回答してもらった。調査協力者の男女比は 37:70 であった。

5.2 調査手続き

留学生の言語能力による影響を避けるため、調査票は原文（英語）を中国語に翻訳して作成した。調査票の信頼性を確認するため、本調査を行う前に、6名の大学院留学生（男女各3名）に予備調査の回答に協力してもらい、質問紙を修正・改善した。調査の配布・回収は2016年7月から9月までであった。

5.3 調査項目

(1) メディアの利用状況

ソーシャルメディアの連絡相手の選択、一般的なニュースのソース選択、ネット上の最新ニュースのソース選択、国際ニュースへの関心度を指標として、メディア利用状況を調査する。

ソーシャルメディアの連絡相手の選択を下記の2つの質問で行う。

- | |
|---|
| 問1 母国語の SNS を平均どのぐらいの時間で利用していますか？
問2 日本人の友達と直接連絡を平均どのぐらいの時間で行っていますか？ |
|---|

一般的なニュースのソース選択を下記の2つの質問で行う。

- | |
|--|
| 問3 母国のマスメディアから発信されるニュースを平均どのぐらい視聴していますか？
問4 日本のマスメディアから発信されるニュースを平均どのぐらい視聴していますか？ |
|--|

上記の4つの質問を以下の8つの選択肢から回答してもらったこととした。

- | |
|---|
| 1. まったくしない、
2. 月に1時間以内、
3. 週に1時間以内、
4. 一日に10～30分、
5. 一日に1～2時間以内、
6. 一日に1～2時間以内、
7. 一日に2～4時間以内、
8. 一日に4時間以上 |
|---|

ネット上の最新ニュースのソース選択を下記質問で行う。

問5 ネット上で公開されているニュースを視聴する場合、どの言葉のものを經由してから視聴し始めることが多いですか。

- a. 日本語
- b. 母国語
- c. 英語
- d. その他_____

国際ニュースへの関心度を下記の質問で行い、7 件法(1=「全くない」、7=「非常にある」)で回答してもらおう。

問6 国際的紛争、国同士の対立、国境を巡る争いにつわるニュース報道に関心を持っていますか。

(2) アカルチュレーション

Berry & Kim (1988)のアカルチュレーションの理論に基づき、Ward ら (1994,1999) は Acculturation Index (AI)というスケールを作って、母国へのアイデンティフィケーション (co-national identification) とホスト国へのアイデンティフィケーション (host national identification) を測った。AI は 21 の項目 (例えば: 言語、食べ物、内集団と外集団への見方など)を使い、ホスト国の人との類似程度及び母国の人の類似程度に分けて検討するものである。JiaQi (2013) は AI を 34 の項目に訂正して、留学生の母国文化の保持 (cultural maintenance) と異文化への同化 (cultural assimilation) を検討した。本研究は JiaQi (2013) のものを使い、調査を行った。スケールは 5 件法 (1=「賛成」、5=「反対」) で、2 つの部分から留学生のアカルチュレーションを考察する。第一部分は 17 の項目で、母国の文化との類似程度について判断してもらおう。第二部分は同じように、17 の項目からホスト国の文化の受け入れについて判断してもらおう。例えば、「母国の留学生と良い友人関係を築いている」、「母国以外の友達が多くいる」、「価値観は母国で得たもののままである」という項目から判断してもらおう。

(3) 社会文化的適応

Ward & Kennedy (1999) の「社会文化的適応」スケール (SCAS) は、40 の項目を使い、新しい文脈、環境において体験している日常的困難を検討するものである。SCAS は、異文化接触での新しい文化に対するスキル、行動力の獲得を重視している。Ward & Kennedy (1999) によれば、SCAS は様々な対象に適用できて、研究対象によってフレキシブルに訂正できるものだとしている。Jian (2015) は SCAS の 17 個を用い、5 件法 (1=「簡単」、5=「難しい」) で留学生の異文化適応を検討した。本研究は Jian (2015) が使った項目を利用した。例えば「ホ

スト国の価値観を理解する」、「文化の違いを理解する」、「ホスト国の人に理解させる」、「ホスト国の食べ物に慣れる」という項目から、ホスト国の文化に対する理解、認識の困難さについて判断してもらう。

6.結果

概算利用時間の平均値を求めて、グループに分ける。母国語の SNS 利用時間 > 平均値の回答者のグループを G1 とする。母国語の SNS 利用時間 < 平均値の回答者のグループを G2 とする。ホスト国の人との連絡頻度 > 平均値の回答者のグループを G3 とする。ホスト国の人との連絡頻度 < 平均値の回答者のグループを G4 とする。母国語のニュース視聴 > ホスト国語視聴の回答者のグループを G5 とする。母国語のニュース視聴 < ホスト国語視聴の回答者のグループを G6 とする。ネット上の最新ニュースのソース選択について、母国語のニュースを選択する回答者のグループを G7 とする。ホスト国のニュースを選択する回答者のグループを G8 とする。国際ニュースへの関心度の平均値を求めて、関心度 > 平均値の回答者のグループを G9 とする。関心度 < 平均値の回答者のグループを G10 とする。

本調査は「アカルチュレーション」と「社会文化的適応」を変数に取り上げ、回答者のメディア利用によって分けたグループの差を調査して、メディア利用と異文化適応との相関を検討する。

6.1 母国語の SNS 利用

(1)アカルチュレーション

留学生の母国語の SNS 利用時間（問 1）と彼（女）らのアカルチュレーションとの相関について検討を行った。その結果、G1 と G2 に属する回答者の概算の平均値は、母国文化の保持（Cultural Maintenance）には 1% の水準で有意であることがわかった（表 1）。回答者の母国語の SNS 利用は、彼（女）らの母国文化の保持とはポジティブな相関があることが明らかになった。

表 1 母国語の SNS 利用時間とアカルチュレーション

	G1	G2	生起確率(t 検定)
Cultural Maintenance	2.55	2.85	0.007***
Cultural Assimilation	2.97	2.95	----

* p<0.1 ** p<0.05 *** p<0.01

(執筆者作成)

6.2 ホスト国の人との連絡

(1) アカルチュレーション

留学生のホスト国の人との連絡(問 2)と彼(女)らのアカルチュレーションとの相関を検証した。その結果、G3 と G4 に属する回答者は、異文化の同化 (Cultural Assimilation) には 5% の水準で有意であることがわかった (表 2)。回答者のホスト国の人との連絡は、彼(女)らの異文化への同化とはポジティブな相関があることが明らかになった。

表 2 ホスト国の人との連絡頻度とアカルチュレーション

	G3	G4	生起確率(t 検定)
Cultural Maintenance	2.69	2.65	----
Cultural Assimilation	2.91	3.15	0.03**

* p<0.1 ** p<0.05 *** p<0.01

(執筆者作成)

6.3 一般ニュースのソース選択

(1) アカルチュレーション

留学生の一般ニュースのソース選択 (問 3、問 4) と彼(女)らのアカルチュレーションとの相関を確認した。その結果、G5 と G6 に属する回答者は、母国文化の保持と異文化への同化とも有意であることが示された(表 3)。回答者の母国語のニュース視聴は、彼(女)らの母国文化の保持とポジティブな相関があることがわかった。その一方、回答者のホスト国語のニュース視聴は、彼(女)らの異文化の同化とポジティブな相関があることが明らかになった。

表 3 一般ニュースのソース選択とアカルチュレーション

	G5	G6	生起確率(t 検定)
Cultural Maintenance	2.49	2.89	0.001***
Cultural Assimilation	3.12	2.78	0.003***

* p<0.1 ** p<0.05 *** p<0.01

(執筆者作成)

ネット上で公開されている最新ニュースのソース選択 (問 5) と彼(女)らのアカルチュレーションとの相関を検証した。その結果、一般ニュースのソース選択とアカルチュレーションとの相関の結果と一致する。G7 と G8 は、母国文化の保持と異文化への同化という両方の検知でも有意であることが示された (表 4)。ネット上での母国語のニュース視聴は、回答者の母国文化の保持とはポジティブな相関があることがわかった。その一方、ネット上でのホスト国語のニュース視聴は、彼(女)らの異文化への同化とはポジティブな相関があることが明らかに

なった。

表4 ネット上最新ニュースのソース選択とアカルチュレーション

	G7	G8	生起確率(t検定)
Cultural Maintenance	2.56	3.04	0.001***
Cultural Assimilation	3.03	2.66	0.006***

* p<0.1 ** p<0.05 *** p<0.01 (執筆者作成)

(2)社会文化的適応

ネット上で公開されている最新ニュースのソース選択と彼(女)らの社会文化的適応との相関を検証した。G7とG8に属する回答者は、社会文化的適応との相関は10%の水準で有意であることがわかった(表5)。ネット上でのホスト国語のニュース視聴は社会文化的適応とはポジティブな相関があることが明らかになった。

表5 ネット上最新ニュースのソース選択と社会文化的適応

	G7	G8	生起確率(t検定)
社会文化的適応	2.73	2.47	0.067*

* p<0.1 ** p<0.05 *** p<0.01 (執筆者作成)

6.4 国際ニュースへの関心度

(1)社会文化的適応

留学生の国際ニュースへの関心度(問6)と社会文化的適応との相関を検討した。その結果、G9とG10に属する回答者の社会文化的適応は、10%の水準で有意であることがわかった(表6)。国際ニュースへの関心度は、社会文化的適応とはポジティブな相関があることが明らかになった。

表6 国際ニュースへの関心度と社会文化的適応

	G9	G10	生起確率(t検定)
社会文化的適応	2.60	2.73	0.097*

* p<0.1 ** p<0.05 *** p<0.01 (執筆者作成)

7. 考察

黄（2016）は通信環境の変化で、留学生の新たなメディア利用の仕方と対人関係を指摘し、2010年代の留学生のメディア利用と異文化適応との相関を検討した。その結果、母国との連絡と彼（女）らの異文化適応との負の相関が明らかになった。しかし、留学生のメディア利用は、彼（女）らの母国文化の保持と異文化への取り入れには影響があるかどうかについて論述されていなかった。SNS 利用と異文化適応との相関についても述べられていなかった。留学生のニュース視聴と国際報道への関心度についての相関は示されたが、ニュース視聴と異文化適応との相関については示唆されなかった。

本研究は黄（2016）の母国との連絡と異文化適応との相関を踏まえて、留学生の母国語の SNS 利用と異文化適応との相関について検討した。なお、黄（2016）のニュース視聴と国際報道への関心度との相関研究をもとに、留学生のニュース視聴と異文化適応との相関、および国際報道への関心度と異文化適応との相関を調査した。本研究は、異文化適応を母国文化の保持、異文化への同化に分けて調査し、留学生の SNS などのメディア利用との相関を分析した。その結果、留学生の連絡相手の選択と異文化適応との相関が示された。ニュース視聴の選択、国際報道への関心度と異文化適応との相関も明らかになった。

7.1 母国語のメディア利用と異文化適応

JiaQi（2013）は、母国文化と関連のあるインターネット利用は留学生の母国文化の保持とはポジティブな相関があることを示したが、SNS 利用について検討しなかった。N.Park（2014）は留学生の母国語の SNS 利用は彼らのアカルチュレーション・ストレスとポジティブな相関があることを確認したが、母国語の SNS 利用は、特定の SNS に限って調査したものであった。本研究はこれらの先行研究を踏まえて、母国語の SNS 利用と異文化適応との相関を検討するだけでなく、アカルチュレーションとの相関も調査した。その結果、母国語の SNS 利用は母国文化の保持とはポジティブな相関があることを明らかになった。母国語のメディア利用は、母国の文化を維持しながら、母国の価値観とアイデンティティを強化すると述べられているように（Fathi,1973 ; Lum,1991）、留学生は母国語の SNS 利用で、母国の人との連絡を持続すると同時に、母国文化を保持することも可能にしていることが本研究で示唆された。

Kim（2001）は、ニュース視聴などの情報獲得のためのメディア利用は異文化適応と強く相関すると論じている。本研究では母国語のニュース視聴は母国文化の保持とはポジティブな相関があることを確認した。留学生はニュース視聴で、報道の立場が違っている情報ソースを選択することができる一方、ニュースソースの出来事に対する見方、観点に影響されやすいと考えられる。国際報道への関心度と社会文化的適応とはポジティブな相関があることが本調査で示唆された。つまり、ホスト国において、母国語のニュースを主として視聴し、他の立場がどの

ように国際の出来事を捉えているか関心を示していない留学生は、母国とホスト国の両方の文化の観点に立って、物事を見ることができず、社会文化的適応が難しくなると考えられる。2010年代の現在、SNSの多機能化と普及に伴い、母国の人とのコミュニケーション、母国の人の最新ニュース、国際の出来事に対するコメントに接触することが容易になっている。その一方、他の文化の立場に立たず、よく触れている母国文化の価値観、立場だけで出来事と物事を考える傾向も見られる。それはホスト国文化の理解、受け入れをさらに難しくすると考える。多文化コミュニケーションを通して、多様な観点や立場から物事を理解する能力を養うことができるが、偏った母国との連絡と母国語のニュース視聴は、このような成長の妨げになるのではないかと考える。

7.2 ホスト国のメディア利用と異文化適応

Kim (2001) は「ホスト国の人とのコミュニケーションは異文化適応とはポジティブな相関がある」と述べている。本研究はホスト国の人との連絡とアカルチュレーションとの相関を検討した。その結果、ホスト国の人との連絡は、異文化への同化とはポジティブな相関があることが明らかになった。Jian (2015) は、留学生のホスト国の人との直接的な連絡と異文化適応との相関を検討したが、異文化への同化との相関についての調査はなかった。本研究では、ホスト国の人との連絡は、異文化への同化と相関することを確認することで、異文化適応とのポジティブな相関を確認した。

Goldlust & Richmond (1974) は母国語のメディアに依頼し、ホスト国の新聞を利用しない人は、アカルチュレーションが低いことを論述している。Chen (2004) は、ホスト国語のニュースを視聴する留学生は、他の学生よりホスト国に対して帰属感が強いと論じている。留学生のホスト国語のニュース視聴の重要さが Goldlust & Richmond (1974) と Chen (2004) の研究により強調されている。本研究は異文化適応をアカルチュレーションと社会文化的適応に分けて、留学生のホスト国語のニュース視聴との相関を検討した。その結果、ホスト国語のニュース視聴は、異文化への同化とはポジティブな相関があることが明らかになった。なお、ホスト国語のニュース視聴は、社会文化的適応とはポジティブな相関があることが確認された。ホスト国語のニュース視聴を通して、異文化と接触する機会が提供されているだけでなく、母国文化以外の価値観、他文化の立場からの考え方に触れることも可能にしていると考えられる。本研究は留学生のホスト国語のニュース視聴を異文化への同化との相関、及び社会文化的適応との相関の検討を通して、彼（女）らの異文化適応とはポジティブな相関があることを確認した。

8.まとめ

黄 (2016) の研究結果を踏まえて、本研究は SNS 利用、ニュース視聴と異文化適応との相関

を検討した。母国語の SNS 利用は母国文化の保持とはポジティブな相関があることが明らかになった。また、ホスト国の人との連絡は異文化への同化とはポジティブな相関があることも示唆された。なお、母国語のニュース視聴は、母国文化の保持と社会文化的適応にはポジティブな相関があることがわかった。その一方、ホスト国語のニュース視聴は、異文化への同化と社会文化的適応とはポジティブな相関があることが確認された。さらに、国際ニュースの関心度と社会文化的適応との相関を検討して、ポジティブな相関があることがわかった。以上から、留学生の SNS 利用、ニュース視聴の選択は、彼（女）らの異文化適応とは相関があることが本研究で明らかになった。

2010 年代の現在、ホスト国においても、母国語の SNS と母国語のニュース視聴を容易に利用する環境が用意されているが、本研究の SNS 利用をニュース視聴につけた調査結果により、留学生のメディア利用の仕方は異文化の受け入れとは相関があることがわかった。そのため、異文化の視点に立ち、物事の利害関係をバランスよく見ることができるように、留学生は SNS 利用、ニュース視聴のようなソーシャルメディアを母国以外のものを活用すべきだと考える。また、留学生の SNS 利用、ニュース視聴と異文化の同化との相関を踏まえて、留学の関係者は、留学生のソーシャルメディアの利用の仕方が、留学生とホスト国の交流の促進のための入り口の一つとしてとなることを検討すべきだと考える。

本研究は中国人留学生という限られた対象で、異文化適応を「アカルチュレーション」と「社会文化的適応」に限って調査したものであったが、SNS 利用とニュース視聴及び国際関心度の調査を通して、メディア利用と異文化適応との相関が明らかになった。今後は、他の大学と他の国の留学生を対象に、研究の規模を広げる必要がある。なお、母国語の SNS 利用の方法とニュース視聴の方法を改めて検討し、留学生のメディア利用と異文化適応との相関をさらに研究していく。

<引用文献>

大向一輝(2015)「SNS の歴史」『通信ソサイエティマガジン』34,70-75.

草野真一(2015)『SNS って面白いの？何が便利で、何が怖いのか』講談社

黄偉明 (2016)「留学生のメディア使用と国際報道の受容・異文化適応」『現代社会文化研究』62,109-125.

総務省 (2015)「情報通信白書」<<http://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h27/pdf/n4200000.pdf>>.

Accessed 2017, January 7

松尾豊&安田雪(2006)「SNSにおける関係形成原理－mixi のデータ分析－」『人工知能学会論文誌』22(5),1-11

Berry, J. W. (1980). Acculturation as varieties of adaptation. In A. M. Padilla (Ed.), *Acculturation: Theory, models and some new findings* (9-25). Boulder, CO: Westview Press.

Berry, J. W. (1997). Immigration, acculturation and adaptation. *Applied Psychology*, 46, 5-68.

- Berry, J.W., Phinney, J.S., Sam, D.L., & Vedder, P. (Eds.) (2006). *Immigrant youth in cultural transition: Acculturation, identity and adaptation across national contexts*. Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates.
- Berry, J. W., & Kim, U. (1988). Acculturation and mental health. In P. R. Dasen, J. W. Berry & N. Sarorius (Eds.), *Health and cross-cultural psychology: Toward applications* (207-236). Newbury Park, California: Sage.
- Berry, J. W., Kim, U., Power, S., Young, M., & Bujaki, M. (1989). Acculturation attitudes in plural societies. *Applied psychology*, 38(2), 185-206.
- Berry, J. W., & Sam, D. L. (1997). Acculturation and adaptation. *Handbook of cross-cultural psychology*, 3, 291-326.
- Boyd, d. m. and Ellison, N. B. (2007). Social Network Sites: Definition, History, and Scholarship. *Journal of Computer-Mediated Communication*, 13, 210–230.
- Carroll J. Glynn, Michael E. Huges, Lindsay H. Hoffman (2012). All the news that's fit to post: A profile of news use on social networking sites , *Computers in Human Behavior*, 28(1), 113–119
- Cemalcilar, Z., Falbo, T., and Stapleton, L. M. (2005). Cyber communication: A new opportunity for international students' adaptation? *International Journal of Intercultural Relations*, 29, 91-110.
- Chen, X. (2004). Acculturating on the Internet: A survey study of international students' online communication and acculturation. Paper submitted to the Global Fusion 2004 Paper Competition.
- CNNIC (2016) 「2015 年中国社交应用用户行为研究报告」
<<https://www.cnnic.net.cn/hlwfzjy/hlwzxbg/sqbg/201604/P020160722551429454480.pdf>>,
Accessed 2017,January 7
- Ellison, N., Steinfield, C., & Lampe, C. (2007). The benefits of Facebook “friends:” Social capital and college students' use of online social network sites, *Journal of Computer-Mediated Communication*, 12, 1143-1168.
- Fathi, A. (1973). Mass media and a Muslem immigrant community in Canada. *Anthropologica*, 15, 201-230.
- Goldlust, J., & Richmond, A. H. (1974). A multivariate model of immigrant adaptation, *International Migration Review*, 20, 193-219.
- Gordon, M. (1964). *Assimilation in American life*. New York: Oxford University Press.
- JASSO (2015) 「平成 27 年度外国人留学生在籍状況調査結果」
<http://www.jasso.go.jp/about/statistics/intl_student_e/2015/_icsFiles/afieldfile/2016/03/14/data15.pdf>,
Accessed 2017,January 7
- JiaQi Li, Xun Liu, Tianlan Wei&William Lan (2013) Acculturation, Internet use, and psychological well-being among Chinese international students, *Journal of International Students*, 3 (2), 155-166
- Jian Raymond Rui, Hua Wang(2015) Social network sites and international students' cross-cultural adaptation, *Computers in Human Behavior* ,49, 400–411
- Kim, Y. Y. (2001). *Becoming intercultural: Integrative theory of communication and cross-cultural adaptation*. London: Sage.

- Kim, Y. Y. (2002). Adapting to an unfamiliar culture: An interdisciplinary overview. In W. B. Gudykunst & B. Mody (Eds.), *Handbook of international and intercultural communication* (2nd ed., 259-273). Thousand Oaks, CA: Sage.
- LaFromboise, T., Coleman, H., & Gerton, J. (1993). Psychological impact of biculturalism: evidence and theory. *Psychological Bulletin*, 114, 395-412.
- Lin, J.H., Peng, W., Kim, M., Kim, S.Y., & LaRose, R. (2012). Social networking and adjustments among international students. *New Media & Society*, 14, 421-440.
- Lum, K. (1991). Communication and cultural insularity: The Chinese immigrant experience. *Critical Studies in Mass Communication*, 8(1), 91-101.
- Namkee Park, Hayeon Song b, Kwan Min Lee (2014) Social networking sites and other media use, acculturation stress, and psychological well-being among East Asian college students in the United States, *Computers in Human Behavior*, 36, 138-146
- Redfield, R., Linton, R., & Herskovits, M. J. (1936). Memorandum for the study of acculturation. *American Anthropologist*, 38, 149-152.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1993). Psychological and sociocultural adjustment during cross-cultural transitions: A comparison of secondary students at home and abroad. *International Journal of Psychology*, 28, 129-147.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1994). Acculturation strategies, psychological adjustment, and socio-cultural competence during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, 18(3), 329-343.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1999). The measurement of sociocultural adaptation. *International journal of intercultural relations*, 23(4), 659-677.
- Ward, C., & Rana-Deuba, A. (1999). Acculturation and adaptation revisited. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, 30(4), 422-442.
- Zak, I. (1973). Dimensions of Jewish-American identity. *Psychological Report*, 33, 891-900.

主指導教員（中村隆志教授）、副指導教員（原田健一教授・杉原名穂子准教授）